

ヨハネによる福音書 21 章 1～14 節

はじめに

・「ヨハネによる福音書」は元々は 1～20 章までが本文で、今月の 21 章は一般的には、後に書き足された「補遺」と考えられています。

・いつ・誰によって加筆されたかについては、確かなことは不明です。ただし、通常、ヨハネの教会の手によるものと推測されています。

・その内容は、大きく 次の 4 つにまとめられます。

① 復活のキリストがティベリアス湖畔で弟子たちにその御姿を現わされる → 大漁の奇跡を起こす → 弟子たちと食事を共にする (1～15。今月の箇所)

② 復活のキリストがペトロを牧会、伝道へと派遣する (15～19)

③ イエスの愛しておられた弟子をめぐる、復活のキリストとペトロのやり取り (20～23)

④ あとがき (24～25)

・編集上の経緯など、上記のような成立の事情から、21 章は幾つか、分かりにくい問題を含んでいます。例えば、すぐ前の 20 章で、皆が復活のキリストにお会いし、元気を頂いて 人々のもとに遣わされたはずなのに、これに続く目の前の 21 章で、その彼らが故郷のティベリアス湖に戻ってしまっている。しかも、どうも、元気が良さそうにはみえない。というような不明な点が、そこには散見されます。

・しかし、そうであってもなお、そこには実に豊かな語りかけが置かれています。そのあれこれを読み取り、聴き取って、生ける力をそこから頂いていけるよう、さやかな信仰の目を持ちたいと思います。ここでは、一応、20 章以降の出来事として、今月の箇所を読み進めていきたいと思います。

ティベリアス湖での「大漁の奇跡」の様子 (1～14。今月の箇所)

・「ティベリアス湖」は別名「ガリラヤ湖」とも「ゲネサレト湖」とも呼ばれた湖で、その湖畔に 7 人の弟子たちが集まっていました (2)。

その 7 人とは、以下のとおりです。

① ペトロ (ガリラヤ湖の漁師出身)

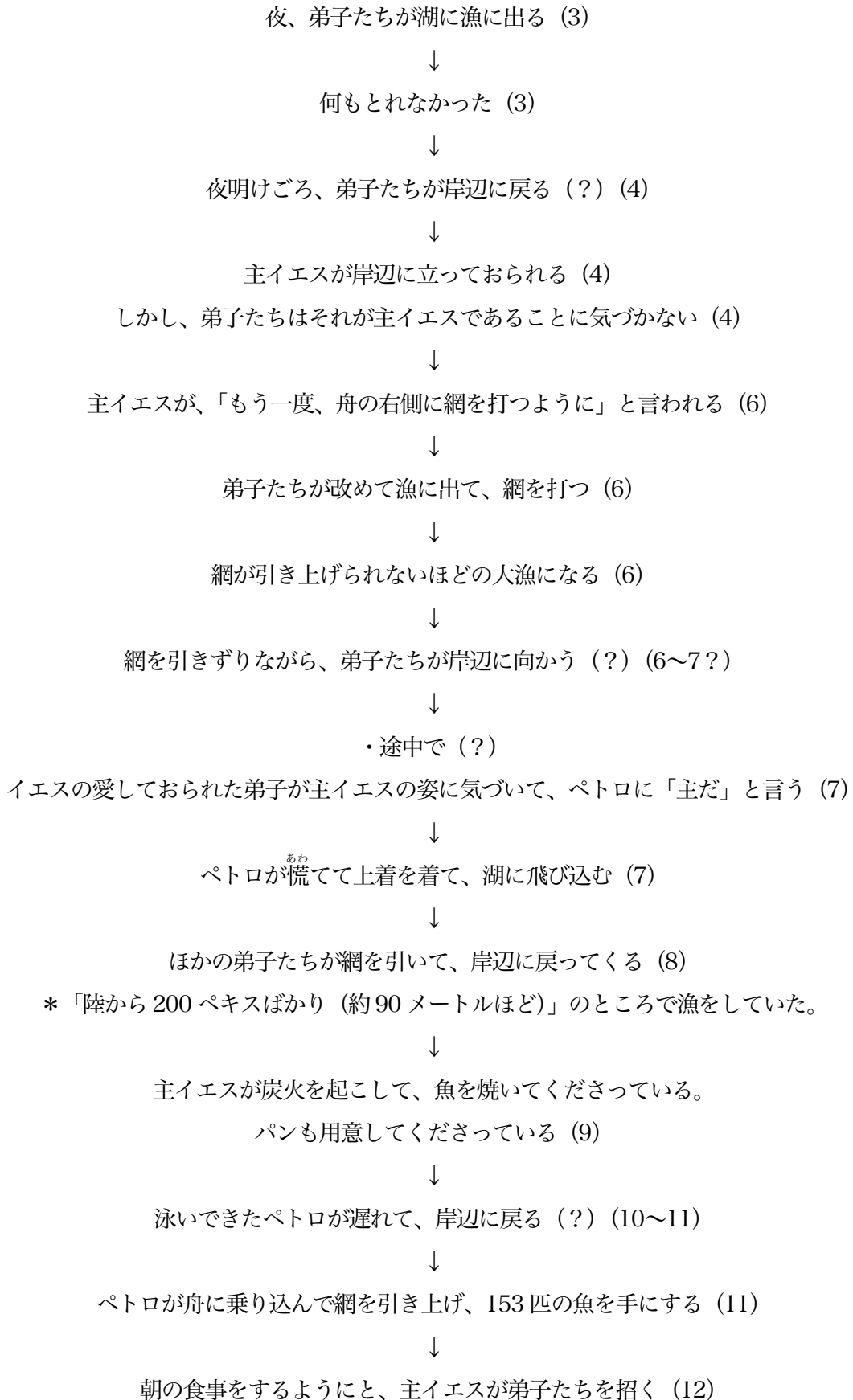
② トマス (カナ出身?)

③ ナタナエル (カナ出身)

④⑤ ゼベダイの子たち (ヤコブとヨハネ。ガリラヤ湖の漁師出身)

⑥⑦ ほかの 2 人の弟子

・そこで、復活のキリストによって「大漁の奇跡」が起こされます。事の様子を分かりやすく整理すると、次のようになります。



漁の魚も加えて (10)、皆で食事を共にする。

主イエスがパンと魚を弟子たちに与えられる (13)

解説あれこれ

・「夜」の漁 (3)

ガリラヤ湖は、夜間が漁に適していました。また、漁師が朝一番で魚を市場に出すためにも、夜の漁が最適でした。

・「イエスの愛しておられたあの弟子」(7)

ヨハネ福音書に独特の呼称で、類似の表現が何カ所か、ほかにも見られます。ただし、それが具体的に誰を意味するのか、確かなことはいま一つ不明で、様々に推測がなされています。その中で比較的多いのは 12 弟子の一人のヨハネと見るものですが、もしそうだとすれば、2 節にある「ゼベダイの子たち」の一人ということになります。ヤコブの兄弟で、ガリラヤ湖の漁師出身のヨハネです。

・「百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった」(11)

どうして「153 匹」なのでしょう。数をわざわざ記しているその理由は何か。数字にながしか、特別な意味合いがあるのか。興味深いところです。

実際、これまで、幾つもの想像や推測がなされてきました。その主なものを御紹介すると、次のようなものがあります。

① 古代、魚の種類全体が「153」と考えられていた。そして、それは世界の民族全体を象徴した。したがって、ここで意味されているのは、全世界が主イエスの福音によって捕らえられるということである。

② 「1~17」の数字を順に全部加えると、「153」になる。そして、その最終の「17」は「10」と「7」を加えたもの。それらはそれぞれ、律法の大本たる「十戒」の「10」と「御霊の 7 重の賜物」(イザヤ 11:2~3 参照。下記「*」も参照)の「7」を意味している。それゆえ、「153」というのは、神の戒めに従うことで聖霊の豊かな贈り物を頂くことができると教えるものである。

* 「御霊の 7 重の賜物」とは、中世の神学者 トマス・アクィナスが「イザヤ 11:2~3」に基づいて列挙したもの。すなわち、知恵、識別(口語訳「悟り」)、思慮(深慮)、勇気(才能)、主を知ること(主を知る知識)、主への敬い(恐れ=尊崇)、主への畏れ(恐れ=畏敬)の7つである。

③ 「シモン」のギリシア語表記(Σίμων)を構成する各文字をアルファベットの順序数に転換し、その数を加えると「76」。一方、「魚」というギリシア語(ἰχθύς)を構成する各文字を同様に数字に転換し、その数を加えると「77」となる。そのようにして、両者を合計すると「153」に。つまり、シモン・ペトロは神に任命された「人間をとる漁師」とであると言っているのである。

④ 153 は、50×「3」に「3」を加えたもの。それはすなわち、「三位一体」を強調したもので、三位一体の神が復活のキリストにおいて豊かに働かれていることを意味している。

⑤ その他。

ただし、実際のところはどれも確かな裏づけがなく、いずれに断定することもできません。

はたして、「153」という数字にはどんな意味合いがあるのでしょうか。それぞれに思いを巡らし
てみると、思わぬ発見があるかもしれません。

・「イエスが死者の中から復活した^{のち}後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」(14)

弟子たちに限って言えば、これで3度目となります。すなわち、①みんなで家に身を潜めていた
とき(20:19~23)、②同じ家でトマスに御姿を現わされたとき(20:24~29)、そして③今回の
3回です。

ただし、マグダラのマリアを加えると、4度目と言えます(20:11~18)。

[参照] 今月の箇所と似たところ、また関連がありやもしれぬところとして、次のような箇所があり
ます。あわせて御覧ください。

- ① ヨハネ 20:11~18 (マグダラのマリア、復活のキリストに会う)
- ② ルカ 24:13~35 (2人の弟子と復活のキリスト。エマオ途上の出来事、エマオでの出来事)
- ③ ヨハネ 6:1~15 (五千人の給食)
- ④ ヨハネ 13:21~30 (最後の晩餐)
- ⑤ ルカ 5:1~11 (イエス、ゲネサレト湖畔でペトロらを弟子にする)

[参考] 復活後の主イエスの足取り

・イエス・キリストの復活後の地上における足取りについては、4つの福音書で、その記録が微妙に
異なっています。御参考までに、それぞれ各福音書の記すところを以下に書き出しておきます。

1. マタイによる福音書

エルサレムでの復活(→「ガリラヤで会う」との予告)→ガリラヤで弟子たちと会われる→弟子た
ちへの大宣教命令(→ガリラヤで昇天?)

2. マルコによる福音書

エルサレムでの復活(→「ガリラヤで会う」との予告)→田舎(エマオ?)に向かう二人の弟子た
ちに御姿を現わされる→(エルサレムの?/ガリラヤの?)11人の弟子たちに御姿を現わされ、大
宣教命令を与えられる→(エルサレムで?/ガリラヤで?)昇天

3. ルカによる福音書

エルサレムでの復活→エマオへ向かう二人の弟子たちに御姿を現わされる→エルサレムの弟子たち
に御姿を現わされる→弟子たちをベタニアの辺りまで連れていかれる→ベタニアの辺りで昇天

4. ヨハネによる福音書

エルサレムでの復活→エルサレムの弟子たちに御姿を現わされる→エルサレムのトマスに御姿を現
わされる→ティベリアス湖畔(ガリラヤ湖畔)の弟子たちに御姿を現わされる(→ガリラヤで昇天?)

- ・このように、復活後の地上における足取りは、いま一つ 確かではありません。
- ・とはいうものの、細かな差異を超えた 全体を貫く太い貫流として、聖書はそれに向かう者に何を
読み取るように求め、何を受け取ることを期待しているのか。そのことから視線を外すことなく、復
活の出来事に向き合いたいと思います。そして、そこから、いのちの^{かて}糧を頂いていきたいと願いま

す。

.....

今月の箇所は様々なことを連想させ、思い起こさせます。

舞台になっている「湖」とか、魚が「とれた」とか「とれなかった」とか、あるいはまた「パン」と「魚」を食べる「食事」の場面とか、それらから いろんなことが思い浮かばないでしょうか。あるいはまた、弟子たちの一挙手一投足とそこに関わり、そこで発せられるイエス・キリストの姿と言葉。

私たちは、それらのそこかしこから、どんなメッセージを聴き取るでしょうか。どんな語りかけが聞こえてくるでしょうか。今月も、聖書の言葉と出来事とから豊かないのちを頂きたいと思います。